

はきものをそろえる心

秋田経済研究所

理事長 新谷 明弘

今月号では、7月に開催された株式会社小宮コンサルタンツ 代表取締役CEO小宮一慶氏による「成功するリーダーシップの条件」の講演内容をお届けしています。「経営」という仕事の本質を指摘されている講演です。ぜひ参考にさせていただきたいと思います。

講演の中で小宮氏が、「私の師匠は20年ほど前に亡くなった長野の曹洞宗のお坊さん」と話されていたので、講演後「そのお坊さんとは円福寺の藤本幸邦さんですか？」とお尋ねしたところ驚かれました。小宮氏は、長野県にある円福寺の住職、藤本幸邦老師が創設された「円福友の会」の東京の代表を務めておられるということでした。

藤本幸邦老師は曹洞宗の最高顧問を務められた人で、平成21年に99歳で亡くなられるまで国内外に師と仰ぐ人が多い方でした。私は、「はきものをそろえると心もそろふ 心がそろふとはきものもそろふ」で始まる『はきものをそろえる』という詩に会い藤本老師のことを知りました。藤本老師は、この詩を戦後間もない混乱の時期に曹洞宗の教えである「脚下照顧」を分かりやすい言葉で伝えようとして作られたと聞いています。「自分のはきものを揃えない行為は人を思いやる心が抜け落ちている。他の人が乱したはきものを黙って揃えることができる思いやりの心を持つ人になってほしい」という思いから創作されたといえます。

この「はきものをそろえる」を別の形で表現されている方がいます。ノートルダム清心学園の理事長であった故渡辺和子さんです。渡辺さんは「面倒だからしましょう」と面白い言葉で学生たちと約束していました。普通「面倒だからよそう」、「面倒だから後回しにしよう」、「面倒だから人にやらせよう」となりますが、これを「面倒だけどやりましょう」ではなく、「面倒だからこそやりましょう」と約束したものです。「靴を脱いでそろえるのは面倒、だからこそそろえましょう」ということを求めたものです。「あなたたちには脱いだ履物をそろえる自由がある。そろえないで脱ぎっぱなしにして上がる自由もある」。しかし単に快適さを求め、簡単なことを欲してしまうと、自分を律し、他人を慮る能力が欠落していくことにつながってしまう。だから、あえて「面倒だからやりましょう」という心を持つことは、自律した心と利他の心を持ち続けるためには欠かせないというものです。「はきものをそろえる」と「面倒だからやりましょう」は同じ意味を持つ言葉といえます。

AIが日常生活にまで普及し、コスパやタイパが当たり前に求められる時代にあって「はきものをそろえる心」を求めることは、今の時代に通用しないようにも思われますが、自分をコントロールし、どうすべきか考え行動できることは、主体性を持ち、人としてよりよく生きることにつながるはずです。そして、企業経営や仕事への向き合い方においても、この「はきものをそろえる心」は基本となる考え方につながります。

小宮氏は、講演の中で何千年もの間多くの人が正しいと言ってきたことをコツコツと勉強し、根幹となるものを持つことの大切さをお話しされています。そして、経営とは正しいやり方の積み重ねであるとも表現されています。基本（正しいやり方）をないがしろにしては、変化の激しい環境への対応ができるはずがありません。自身にとっての「はきものをそろえる心」とは何か、立ち止まって考える機会にしてみてもいいのではないでしょうか？